

山崎郷去来

No. 58

57:1.30

兵庫県赤粟郡
山崎町教育委員会内
山崎郷土研究会
電話②2000

近世初頭の山崎藩(十八)

島田清

二、池田輝澄時代(統十七)

○ 池田家の家中騒動(4)

4. 騒動勃発の素地(Ⅱ)

1 寛永九年の池田輝澄

寛永九年七月中旬、山崎城に江戸からの奉書が届いた。

老中より、城主池田輝澄に宛てたものである。

この年は、幕府にとっても、池田家にとっても、また、輝澄自身にとっても、まことに多事であった。

まず、将軍家では、正月二十四日、秀忠が薨去した。

目次

| | |
|--------------|------|
| 近世初頭の山崎藩(十八) | 島田清 |
| 八幡宮物語(その二) | 根岸元彦 |
| 切腹私注 | 浅田耕三 |
| 民話二編 | 船曳正巳 |
| 史跡部だより | |
| 秋季研修旅行記 | 長田重男 |
| 事務局だより | |
| 編集後記 | |
| | 十八 |

秀忠は、寛永八年(一六三一)七月十七日、江戸城内の紅葉山御宮へ参詣したのち発病し、月を越えてから次第に重くなった。そして、翌寛永九年正月二十四日亥ノ刻(午後十時~十一時)、五十四歳で薨じた。

将軍職は、既に、元和九年(一六二三)七月、家光に譲っている。したがって、身は「隠居」であった。普通でいえば、何の問題もないわけであるが、実際は大きく違う。なぜなら、秀忠は、将軍職を譲った翌寛永元年九月、西ノ丸に移り、大御所として政務を行っていたからだ。ちょうど、家康が慶長十年(一六〇五)将軍職を秀

忠に譲り、大御所と称して駿府に移り、大小の命令を発したのと同様である。この時点における徳川幕府の政治は、西ノ丸を中心とする大御所政治と、家光側近による将軍家政治との二元的様相を呈していたわけで、歴史家は、この期を「寛永初期政治時代」と呼んでいる。

将軍家光は、池田輝澄からいって母方の甥、同じ慶長九年（一六〇四）の生れである。また、秀忠は二十五歳上の叔父である。これまで、何度も述べたように、秀忠の将軍在任中、輝澄はわりあい厚遇されていた。得意の馬術を上覧に供したこともある。寛永八年（一六三一）七月二十九日、次弟政綱が病死して赤穂藩三万五千石が収公され、これを返し与えられた忠雄が、さらに二人の弟に分ち与えたいと申出たときも、輝澄には二万五千石、輝興には一万石が与えられた。元和元年、宍粟郡三万八千石の領主として出発した輝澄が、この結果、六万三千石の大名となり、一躍、播磨における第三位の石高を持つ大名となったわけには、将軍家の恩顧が並々でなく働らいている。「寓簡」の著者が述べたように、東照神君の外孫として、特別、目をかけられていたのは確かであろう。

同書には、更に、領地に帰る暇を与えられ、暇乞に登城した輝澄に対して、秀忠が特に傍近く呼び寄せ、

〃将軍は、お前のことを、特に、心にかけているよ

うだ。いいことが起ころうだろう。〃

という意味のことを話した、と伝えている。

秀忠にも、家光にも、このように愛された輝澄は、それなりに、人柄のよさをそなえていたのであろう。

ところが、四月になって、思いがけぬことが起こった。二つちがいの同母兄で、弟思いの岡山藩主池田忠雄が急死したのだ。忠雄は、元和元年、大阪夏の陣の起ころる直前に急逝し忠継のあとを嗣いで岡山城に入り、戦端が開かれると城兵をひきいて大阪に向い、兄利隆と並んで神崎川口を攻めて功を立てた。

凱旋後、忠継の遺領を継ぐこととなったとき、幼弟輝澄・政綱・輝興の三人に宍粟・赤穂・佐用の三郡を分与し、さらに寛永八年、政綱の逝去によって赤穂郡三万五千石が収公され、忠雄に返し与えられたとき、弟の封禄豊かならぬのを顧慮して二弟に分与したことも既に述べたとおりであるが、これらの処置からみて、忠雄の心には、

山崎銘菓さつき

御菓子司

あ ら き

さつき通・TEL ②0170

最新型カラー現像機導入 カラープリント・1時間仕上可能



同母弟をよくしてやろうという気持がいつもはたらいいていたことがわかる。それだけに、急逝したときの輝澄・輝興の悲しみは想像に余るものがあったであろう。池田家自体の打撃が大変だったことはいうまでもない。忠雄の嫡子勝五郎は、このとき、三歳にしかなっていなかった。岡山城は山陽道の要衝である。この地を、三歳の幼児にまかせることはできない。元和二年、姫路城主池田利隆がなくなった際、九歳の光政に姫路城をまかせられないと、因幡・伯耆の二国へ移し、あとへ秀忠の信任あつい本多忠政を入部させたことを思いあわせて、

岡山城の上下が不安に閉ざされたのもあたりまえだ。幕府では、これを裏書きするごとく、勝五郎の代りに輝澄を据え、山陽道の要衝岡山の固めを磐石たらしめようとした、と『寓簡』は記している。しかし、輝澄は、いかに幼年とはいえ、兄の嫡子が敵存するのをさしおいて、自分が宗家を

嗣ぐことは妥当でないと固辞し、遂に、勝五郎の相続がきまった、という。輝澄の性格や、ものの考え方の一端がにじみ出ている佳話である。

忠継の薨後、二カ月を経た六月十八日、勝五郎に対し、父の跡目を相続させる幕命が下った。ただし、岡山は要衝であるから、従兄弟にあたる鳥取城主池田光政と所領を交換せよと命ぜられた。十五年前、同じ理由によって姫路より鳥取に移された光政はこのとき二十四歳、青年藩主として注目されるようになっていたのである。

幕府はこの処置をきめたあと、今後の藩政に手落ちのないよう、一門として輝澄・輝興、藩首脳として筆頭家老の荒尾但馬守、次席家老の同志摩守を城中に呼んだ。そして、互に協力し、幼君を輔佐するよう申渡した。

輝澄が播磨に下り、領所の山崎城に入ったのはこの後で、季節は既に夏となっていた。領主の領所帰還は久しぶりである。それだけに、施政その他の仕事が山積していた。

江戸時代初期は、新しい制度がつくられ、それに入っただばかりのときである。上下とも、馴れていない。武士同士、町人同士、百姓同士、さらには武士対町人、武士対百姓の関係が、施政を通じ、生活に関連し、何かと喰い違った。藩政は、それを克服して進められねばならぬ。山崎に帰った輝澄は、ゆっくり落付く間もなくそれを聴

き、必要な処置を指示した。終ると、幕府から命ぜられた重要任務の遂行にかからねばならぬ。それは、岡山から鳥取へ移封した池田勝五郎藩中のおさまり具合を視察し、それを落ちつかせるよう指導することである。

山崎の夏は暑い。〃播磨の北海道〃といわれた宍粟郡は、土地が播州の西北隅にかたよっているばかりでなく、平地が少く、寒暑の差がひどい。夏の昼間は気温が上昇し、凌ぎにくいのも盆地特有の現象である。こうしたときに、行列を組み、駕籠に乗って鳥取へ出かけるのは大変だったにちがいない。

しかし、二十九歳の輝澄は元気で出かけた。

山崎から鳥取へは国道二十九号線が通じている。江戸時代には、これを因幡街道といった。山崎を出ると神野・神戸の盆地を通り、曲里から西北へ分け入って西谷・奥谷を抜ける。播磨・因幡の国境にある戸倉峠は、奥谷

の北端、道谷の西にある。ここを越すと、すぐ若桜だ。若桜は鳥取藩支城のあるところ、鳥取までは十里だ。一行は、木々の葉が黒いほどに覆いかぶさる道筋を、毎日、歩き続けた。

六月十八日、勝五郎の家督相続と同時に発せられた鳥取移封は、何といっても大事業である。元和三年、池田光政が姫路より鳥取へ移ったときは、前任者の池田長幸が六万石であったところへ、三十一万五千石の領主が入るのであるから、新しい受け皿づくり、すなわち、藩士を収容する住居の新設が大変だった。藩の上下は、このことに非常に苦労した。これに比べると、今度の移封は容易であった。石高が同程度であり、藩主同士が従兄弟の間柄であったから、総べてスムーズに行われた。しかし、出陣のように男子だけが出て行くのではない。家族ぐるみの出立であり、家財道具も最少限度は持ち運ばねばならぬ。これらの運搬に必要な人馬の用意はなかなか骨が折れる。もちろん、路銀の調達も容易でない。

鳥取・岡山間の通路は、今の因美線・津山線に沿うてつくられていたが、普通に歩いて一週間かかる。城地請取りの責任者は一行より先に出発し、幕府の上使立会のもとにそれをすませるが、他の藩士たちは、それぞれの組に分れ、部隊を編成して出発して行く。それに、有力な町人（御用商人）や僧侶の同行するものがあるので、

時計・ぬがね・宝石

津村時計店

中央通り・TEL ②0355

現在では、ちょっと想像できぬほどの大移動だ。寛永九年の夏は、鳥取・岡山の両城下を上を下への大混雑をしたときである。

輝澄が鳥取へ着いたのは、こうした時期であつた。まだ、落付くところへはいつていなかつたけれども、幕命を帯びてやってきた叔父である。親しみがあるとはいへ、威儀を正し、鄭重に迎えたことであろう。

輝澄は、このとき、どんなことをしたか、記録が残っていない。三歳の藩主は江戸に居たし、政治向きのことにはわからぬ。当然のことながら、藩首脳と会見し、施政上、特に心得なければならぬことを論し、必要な検分を行ったにちがいない。

このときの鳥取藩首脳は、筆頭家老が荒尾但馬守成利しげとし、次席家老が同志摩守嵩成たかなりであつた。但馬守の居所は西端の米子城、志摩守は中央部の倉吉城である。

嘗て、大阪冬の陣が起こつたとき、成利の父成房は十六歳の忠継を輔けて出陣した。忠継は頗る美男子で、弱々しい体質であつたが、生れつき孝心があつく、また、一見柔和に見えながら毅然として軍を指揮する才能もち、深謀・明察の器量も備えていた。

利隆が姫路城から出陣したのは十月十九日、忠継はその翌日、岡山城を出発した。二十二日、利隆は西宮に着き、二十六日、京都へ上つて家康に謁し、軍議を授けら

れ、二十七日西宮へ帰り、軍を尼崎に進めた。忠継は、この日、尼崎に着いた。

両池田軍は、これより、連絡をとりながら進撃する手筈にしたが、十一月一日、利隆の軍が久々知から神崎川西岸に進出したとき、忠継軍に連絡しなかつた、というので、忠継は単騎で利隆の陣に赴き、

「今までは、父上同然に頼んでいたのに、何もいわずに先へ進まれるとはお情けない。それならば、私も、これから、自分の思うように兵を進める。ご承知されたい。」

と告げた。多少、言いがかり的な感じのすることばであるが、忠継としては、兄の軍にかかわらず、思いきつた活動がしたかつたのであろう。

忠継は、これからあと、いつも諸隊に先んじて兵を進め、十一月七日、神崎川の下流を渡り、一番に、大和田・北中島を占領した。そして、直ちに使を二条城へ馳せ、家康に報告した。家康は、「予が孫じゃ、輝政の子じゃ」と手を打って喜んだという。

忠継は、このあと、さらに中津川を渡って南中島を占領し、翌日、野田へ押寄せた。使番衆は、

「このように一手きりの抜駈をされては軍法に反する故、引入られるよう。」

と制止した。しかし、忠継は容易にきかぬ。使番衆は

「この上は大御所の指図を受けよう。」
 と、二条城へ申し出た。家康はこれを聞くと上機嫌で、
 「さてさてしよう（性一性質）のこわきものじゃ。」
 といひ、忠継に対しては荒尾成房を召連れて来るように
 命じた。

忠継が軍を離れ、成房をつれて伺候すると、家康はひ
 そかに成房を召し、

「武蔵守（利隆のこと）が手ぬきしたのに腹を立て
 て張出してきたのは、若い者に似合わしいことじゃ。
 よき主じゃ。よく取立てよ。」

と命じた。

株式会社

安井書店

90山崎町山崎郡栗
 TEL山崎②0700(代)

惜しいことに、この
 若き名将忠継は、翌元
 和元年二月二十三日、
 泡瘡を病んで岡山城で
 卒した。年齒十七歳。
 惜しまぬ人はなかった
 という。

前年、津山城主森忠
 政の女を室にする約を
 結んでいたが、そのこ
 とが行われぬさきに歿
 したため嗣子が無い。

家康は、実弟忠雄にあとを継がせることとした。しかし、
 この忠雄も寛永九年に急逝し、今は、その子勝五郎が相
 続して鳥取城主となったのである。荒尾家も成房が歿し、
 その子成利の代となった。輝澄は帰る前に、この成利を
 引見し、鳥取藩政を担う重要使命を自覚し、遺漏のない
 施政を行うよう注意した。

帰路は、数日前に歩いた因幡街道を逆に進むわけだ。
 幕府からの招命は、こうした多忙なときに届いた。記さ
 れていた用件は、芽出たい栄転の内報と、そのための出
 府命令であって、内報の実態は、駿府城十八万石に甲斐
 のうち六万石の管理を併せて与えられるという、まこと
 にすばらしいものであった。世間の雀が騒ぐ「東照神君
 の孫」というのがやはり光っているのである。しかし、
 駿府城は、このときまで、將軍家光の実弟、駿河大納言
 忠長の居城地である。どうしてこの地が与えられるよう
 になるのか、次に、その実情を述べねばならぬ。

「八幡宮」物語り（その三）

根 岸 元 彦

前回は八幡宮というお宮について、その発祥、祭神、
 神号等全般的なことについて書きましたので、今回は旧

山崎町一帯にわたる総氏神である山崎八幡神社について書いてみます。

まず山崎八幡神社は、何時ごろ此の地に鎮座されたかということですが、これは千年以上も昔のことになるので、くわしいことは全然分りません。だが現在伝えられているのは、昔、この辺りが柏野里といわれていた頃に、篠の丸山麓のどこかにその祠ほこらがあったらしいということです。それを大同二年（八〇七年）柏尾村（加生）の人々が、お社が余り粗末だということで自分達の村に移して神殿を作り祀ったものです。その時の棟札が現在神社の社宝として存在しており、「大同二年正八幡宮社建」と読まれます。この棟札の存在によって由緒の深いことが認められ社格が郷社であったものを県社に昇格されています。

大同二年といえば今から千七百七十五年も昔になり、現存する日本の社寺建築の棟札としては最も古いものの一つになります。本年は創建千七百七十五年の式年祭に当ります。式年祭といえは伊勢神宮は二十年目が式年で御遷宮祭が行われますが、一般の民社といわれる旧府県社以下では、二十五年を式年とする神社が多いようです。しかし、中には播磨一の宮の伊和神社は二十一年目が式年となつて「一つ山祭」が行われ、六十一年目には「三つ山祭」を行います。又、伊和神社の出張所である姫路の

総社では反対に二十一年目が三つ山祭で、六十一年目は一つ山祭です。

山崎八幡神社は二十四年前の昭和三十三年に千七百七十五年の式年祭を行いました。早くもそれから二十五年目の式年祭を迎える訳です。今回の式年祭では表参道石段の改修という記念事業が予定され、表玄関の面目が一新することになっております。大体神社における式年とは、長い歴史の中でのある一定の節目ということ、この年を機会に記念大祭を行つて、二十〇三十年にわたつて傷んだ境内建物等の大修理をするといったように、昔の人たちの智慧でもあっただろうと思います。

加生村に建てられた神社の跡は、加生と門前の境にある小山の頂上で、つい最近までお宮の跡地という訳で聖地として誰も木を伐らず、小さな森となつて残されていたのですが、先般電々公社に売り渡され、現在反射電送の塔が建てられています。

マックスファクター
化粧品・毛糸・袋物

さどや

さつき通・TEL ②0337

この辺は字名を「今宮」地区と云って、山崎町加生字今宮と門前字今宮と二部落にまたがって名前が残っています。今宮というのは、新しくお宮を建てますと、今宮八幡とか若宮八幡とかよんだもので、西宮の戎さんをお迎えした大阪のエビス様を今宮戎というようなことで、各地に残る名称なのです。

この加生にあったお宮が現在地に遷座された由緒は、現在八幡神社の社宝として残っている「八幡宮之記」という巻物に書かれています。これは立派な赤漆塗りの桐箱に納められ、鳥の子紙に達筆で書かれた金箔表装の巻物で、延宝三年（一六七五）大口十右衛門（子節）という人が書いて奉納したのですが、その他戦時中に供出されてしまった。藩主松平侯夫人献納の大釣鐘の銘文などに铸込まれていた由緒記等によると、応仁元年（一四六七）加生の村民が一夜同じ霊夢を見て、八幡宮を東の方へ移せというお告げがあり、早朝に東方を見ると現在の八幡山から光芒がさしているのを認め、あそこに違いないというので現在の地に御遷座したといわれています。その後篠の丸城の守護神とも山崎城の守り神ともいわれ、代々領主たる池田侯、松平侯、本多侯等の尊崇厚く、社殿の造営や数々の神領地や神宝を寄進せられました。これらのお墨付の書状や宝物は現在山崎町郷土館に展示してあります。

又、文政九年に社殿が火災に遭い、古い記録や宝物等を多数焼失したので、現在では見るべきものは余り残っておりません。惜しいことをしたものです。

この火事の際、門前村の和助という人が火烟の中に飛びこみ、御神体を無事救出したというので、時のお殿様から褒美を頂いたと伝えられています。

それから氏神という名称なのですが、これは上古の奈良朝までのころは、^{うしかばね}氏姓制というのが社会の制度で、例えば「玉造氏」という一族が、宝玉を作るという職業をもって朝廷に仕え、^{いむべ}齋部氏は祭祀を行う部族で、この職業をもって仕えるといった具合だったので、その氏族の守り神を氏神といったものです。しかし、後に大化の改新等が行われ、政治の制度が変わって公卿貴族が官吏となつて職制が整備されると、氏神ということの意味がほとんど失なわれてしまいました。

美術・工芸・画材

いとう画廊

贈答品に絵画・版画を!!

出水町通り・☎2-0371

しかし当時、新しく土地を開いて部落が出来るようになる、日本人は必ずその土地の最も見晴らしや日当りのよい高所を定めて、村の守り神を祀ったものです。これが村の鎮守様なのですが、昔からあった氏神様という名称が鎮守様の意味に変化して引きつがれて来たものです。以上は大體関西において見られる現象ですが、関東では「産土神」と呼ばれる場合が多いらしいようです。これは柳田国男氏の説を参考にしました。

また氏神様の守って下さる土地の範囲を氏子地区といつて、その地域に住む人は自然に氏子となります。子供が生れると一カ月目に初宮参りをして氏子にしてもらいます。又、よその氏子地から転入して来ても、自動的にその地の氏子になりますし、要するに氏神様はその氏子地域と住民とを一括して御守護になる訳ですから、従つて住民が仏教徒であろうと他宗教であろうと、そんなことは関係ありません。すべて氏子ということになりますから非常におおらかな、排他的でない、平和な意味を持つた神様です。

その上氏子地区内にも沢山のお宮があります。恵美須神社や総道神社などはまた限られた地域の人が崇敬者として祀つておられます。まだその上、各家々でも自分の信仰する神様をお祀りしています。これらもすべて氏神様の御守護の下にその御神威を発揚される訳です。それ

から日本全国の総氏神として伊勢の皇大神宮があります。日本の神々はこのようにして何重にも日本の国土と国民を御守護になるのです。

それで山崎八幡神社の氏子地域はどんなことになっているかといえますと、昔から色んな変遷はありましたが現在の状態でいいますと、旧山崎町の内旧葛沢村の氏神「大倭物代主神社」俗にいうモロス神社の氏子地である横須、上寺、庄能、今宿の四部落を除く全部の町と、旧城下村の内、春安、段、鶴木、中井、下広瀬と金谷の谷より北の部分とが氏子地区となっています。

なぜこのようにいびつな形になっているかという、明治初年に町村制がしかれた時、大体は旧氏子地域を基準として行政区画がなされ、町村区域が決められたのですが、所々で出入りが出来てしまったのです。わたしの聞いた話でも春安部落など、当時山崎町に入るか城下村につくかで論議があったそうですが、山崎町に入ると商人とつき合ねばならない。そうすると税金が高くなるだろうというので城下村にいったといえます。こんなことで旧氏子地区と町村地区がずれてしまったらしいのです。

又昔の氏子区域では旧山崎町の中でも、福原町までが八幡氏子でそれより北は皆葛沢のモロス氏子だったようです。というのは町並らしい所は福原町までで、その北

は全部畑地であり、家らしい家もなかったらしいのです。古い記録を見ても地名としては、播磨の国^{こおり}宍粟郡山崎村（現在の元山崎）があるだけで、門前村が現われるのは八幡神社が出来て、その下に門前町が発達してからで、現在山崎町で一番古い屋並みといわれる西町ですら、以前は西新町といわれて、山崎藩が出来てから後の新町であつたのです。

ですから中世以前、つまり播州地区を赤松氏が抑え、勢力を張り始めた五、六百年の昔は、宍粟郡の中心は宇野氏が長水城に拠つた頃で、山崎はまだ何の形もなく、萬沢地区が中心で、山崎附近は篠の丸がその出城としてあつただけなのです。

しかし山崎城が築城されてからは、城下町として急速に発展し始め、街並みが形成されて一つのブロックとなり、追々山崎の町が出来上つてきました。山崎に新町が宣言されたのが木下勝俊の「新町申付書」（天正十五年）（一五八七）で約四百年前ですからその頃からモロス氏子地であつた大歳、鴻の口、富士野町地区等も街が出来てゆくにつれ、近くの八幡氏子のブロックに移つて来た模様です。

また当時山崎の西側の山向うの部落である奥小屋も八幡氏子だったようです。今では氏子でありませんがその頃山越への道が遠いので、自分の部落に氏神の社を造る

うとしました。どこから神様を迎えたらよいかという段になつて、それには氏神八幡宮の御神体を運んで来るのが一番だということになつて、夜陰にまぎれて本殿に忍びこみ、御神体をついで逃げ帰つたといひます。その昔ではこんなことはよく起つたそうで、村境を越えてしまふと御神体は取り返せないというのがルールでした。八幡氏は御神体を途中で奪い返したといひ、奥小屋はいや持つて帰つたといひ、山崎八幡は御神体が無いはずだといつてゐるそうですが、昔のことなので真相はどうなのか分りません。神社の御神体は官司でも見ることは許されませんので、確めようも無いわけです。しかし昭和四十八年の御屋根替の時の遷座祭の際、わたしがいま暗らな中で御神体を白布に包んで捧持した時の手ごたえでは、確に箱の中に鎮座して居られると感じました。

それから社号が「八幡宮」であつたり「八幡神社」であつたりしますがこれはどうなのかということですが、明治以前は神号や社号を決定したり、正一位とか従三位とかの位号を神社に贈るのは天皇の宣下^{せんげ}（許可証）によるもので、例えば社号としては、大神宮、神宮、宮、大社、神社、社といった別がありました。大神宮は伊勢の皇大神宮だけですが、神宮号は皇祖や天皇を祀る大社か特別由緒ある古大社で、熱田神宮や明治神宮など全国で十七社、すべて官幣大社でした。宮号は特別の由緒があ

漢方薬と食事指導

株式会社 **ひがしや**
ドラッグストア

山崎町中央通り・TEL ②0109

って、天皇の宣下のあった宮、金刀比羅宮や東照宮など全国で十八社、大社号は正式には出雲大社の一社だけですが、多賀大社とか住吉大社など勝手に大社号を称している神社が数多い。その他のお宮は明治の神社制度では、神社又は単に社だけの弁天社とか稻荷社とかになります。ですから正式に八幡宮と名のれるのは宇佐八幡宮と石清水八幡宮の二社だけといえるのですが、全国の数多い神社では、勝手に神宮号や宮号、大社号を称する社が沢山あるので非常にややこしいことになります。

現在の八幡神社も、昔は宇佐八幡宮や石清水八幡宮から分れたもので、民間信仰の稻荷社を別にすると、正式の神社では全国的に最も多い神社です。以前は元宮との関係上すべて八幡宮と称していましたが、現に山崎八幡も明治以前は八幡宮で、現在かかっている神額も、当時の山崎藩主の染筆ですが皆八幡宮となっていて、す。しかし明治の神社

法では官号を使うことは出来なかった。「県社八幡神社」となりました。終戦後は正式には宗教法人「八幡神社」であります。

宍粟郡には、波賀町の安賀と一宮町西安積と山崎町とに、八幡神社は三社ありますので、特に区別する為に「山崎八幡神社」と称しているわけです。

以上で八幡宮物語は終わりますが、又機会がありましたら民間信仰の厚い「お稻荷さん」とか、神仏混淆による八幡大菩薩、金刀比羅大権現、稻荷大明神といった名号などについてもお話しいたしましょう。

切腹私注

浅田 耕三

郷土史家のEさんから、近頃こんな話をきいた。

天保年間、山崎藩の財政を担当していたある家老職が切腹した。自裁の理由はいろいろ説があってはつきりしないらしいが、興味をそそられたのはその腹の切り方である。

一度目は人にみつかって止められ、切りかけた腹部を縫合された。刀も取り上げられて嚴重に監禁されたが、ある時、監視の隙について火鉢に挿してあった火杓子の

柄を、癒着しかけた傷につきたてつきたてして遂に果てたという。

昭和二十年敗戦の時、ある若い陸軍将校が自殺をはかった。軍刀の抜身に紙を巻いて逆手に持ち腹をくつろげて、いざ切先を突き立てようとして、そのまま失神してしまった。

当人の同僚から聞いた実話である。

おのが腹を切るとなれば相当の豪の者でもこういう事になりかねまい。何となくうなずける話である。が、そうとすればこの家老は、時代の相違という事を念頭に置

いても、なみなみならぬ人物だったといえよう。

物の本によれば、切腹とはいっても元禄期（一六八八―一七〇三）にはすでに、膝前の刀に手を伸ばすと同時に首を打落す形ができ上がっていたらしい。赤穂浪士の切腹もこのやり方を踏んでいる。天保といえはその元

禄からほぼ百三十年ものちの事、しかも長年貧乏藩の台所をやりくりした気苦労の上に労咳でもあったらしいから氣力も衰えていたであろうのに、いずれ頑固一徹な古武士だったのだろう。その風貌が彷彿する。

それにしても何やら息のつまりそうな死に様である。一体「葉隠」にしても幕末の水戸学にしても、なぜあもものつびきならぬ理屈が幅を利かせたのであろう。儒教の影響やら、一途に思い込む日本人の精神構造の特殊性からきたものには違いないが、あのようなやみくもの精神主義は、一つは長い平和で実戦から遠ざかってしまいい、無用化していた武士階級が必然的に行きついたものであった。現実には存亡を賭けた戦争でもしておれば、あんな滅びの美学が生まれてくる筈がない。もっと合理的実利的でしたたかな現実主義の発想があった筈である。

切腹も同じでわが手でわが腹を切るなど、これ程残酷極まる話はなからう。「保元物語」や「義経記」にでてくる初期の切腹は、いずれも敵に追いつめられてやむなくやっている。いわば異常時の異常心理のなせるわざであった。それが平和時の自殺にも定着し武家作法が整うにしたがい次第に形式化していく。新渡戸稲造氏は著書「武士道」の中で、武士が靈魂の宿る腹を切ったのは、いにしえの解剖学的信仰に基づくものと書いておられるが、それよりは苦痛の多い切腹の被虐性が武士の美意識

和洋酒・贈答品・食料品

城内酒店

山崎神姫バスそば
TEL②0369

に叶ったのである。しかし、もし自分が腹を切るとなれば、武士といえどもやはり痛いものは痛い。失敗するのではあるまいか、うろたえるのではないか、当然ながらその心配があった筈で、かくて切腹は極端に形式化し、三宝の短刀はついに扇子に代用される。

それ程迄の形式主義を容認しながら一方では、義理じや一分じや武士道、忠義じやと机上の観念論をあげつらった武士階級は、その閉鎖性のゆえに扇子のおかしきにも気づかなかつたのかも知れない。あわれである。

あわれといえ、幕末、土佐藩に捕われた近藤勇は切腹を許されず打首になった。土佐勤王党の領袖坂本竜馬が近藤に殺されたと信じていた土佐人がその報復として最大の恥辱を彼に与えたのであった。

鉞なたとり 澁ぶち

船 曳 正 巳

播磨、美作、因播の国境に接する位置にあるのが、千草の里（千種）である。千種川の源にあって播磨国風土記に「柏野里敷草村（現在の千種町）に鉄を生じ。」とある。八世紀には既に製鉄されていたことがわかる。備前長船の名刀はこの千草銅できたえられたものである。

千種の北部にある河内字川井に、鉞とり淵と云うところがある。

澄んだ水が荒い岩にあたりくだけて流れていくと、やがて深く沈んだよどみがあって、岩から下をみるとなんとなく吸いこまれる様な気持ちになり、ハツとして、われにかえる深い深い淵である。

この土地に一軒の農家があって、ここには美しい、気だてのよい娘があった。数年前に母をうしなひ、後そえの母がきたがこの継母にもよく仕え、村の若者たちの評判娘であった。始めのうちは大層可愛いがっていたが、

妹が生れてからは、義母はこの娘に辛くあたるようになり、百姓の暇に父が近くの村へタラ仕事の稼ぎにでてしまふと、朝早くから薪こりに追出し、仕事をなまけるとか、三度の食事のことまでいろいろと言つていびりはじめた。しかしどのような無理を言われても、口答

外科・内科

山中医院

院長 山中陽一

山崎町西町・TEL 20036

え一つせずに、「ハイ、ハイ」と素直に仕え、よく働いていた。

ある日、淵の上にある山へ薪こりにいき一生懸命を出していた。昼の弁当を岩に腰をおろし食べ乍ら、優しかった亡き母の面影をしのんでいたとき、ふとしたはずみに横においた鉈が淵にすべり落ちて沈んでしまった。深さ丈余（三米余）の底に沈んだので何もみえずどうすることも出来ない。

義母の顔を思いうかべると、またきつく叱られるだろうと、つらい気持ちでいっぱいになったが仕方なく、すぐと家に帰った。

顔をみるなり義母は、

「お前まだ日がたかいのになんでこんなに早く帰ったのか。」といいました。娘は「鉈がすべって岩から淵へ落ちてしまったの、許して下さい。」と手をついてあやまりました。しかし義母はすごいけんまくで、「お前は仕事がつらいので鉈をわざと捨てたのだろう。」と口ぎたなくののしり、いくら娘が許しを乞うても聞くどころか、「鉈を拾ってこい。もって帰らなかつたら家に入れない。」と追い出してしまった。

娘は泣く泣くまたその淵に出かけ、途方にくれながら涙を流していた。

やがて日も暮れかかった頃、水に亡き母の姿が浮び出

て、「泣くでない、私のところへおいで」と両手を広げてにっこり笑みかけた。

娘は思わず「おかあさん、おかあさん」と呼び乍ら、母の胸に抱かれるように淵へ身を投げ沈んでいった。

その後、村人達が、この岩で休み鉈を置くと必ずその鉈は淵の底へすべり落ちていった。

そのとき「わざとに捨てたのではない、違う、違う」と娘の悲しい泣き声が聞えてきた。

村人達はここを「鉈とり淵」と呼んで、可愛そうなこの娘の話しをいつまでも、いつまでも子供から次の子供へと語りつたえてきた。

椿つばきの逆さか杭ぐえ

船 曳 正 巳

千種町千草字上谷に、安国山教信寺西蓮寺という浄土



宗で、京都、黒谷光明寺の末寺がある。

播磨鑑に「当国加古郡野口村教信上人の石塔有之」云々と書いてある。

昔から上人寂滅の地として、村人達は深く上人の徳を偲び、通称「念仏寺」と言つて、毎年三月九日から十六日までの七日間、遠近の僧侶が集まり盛大に念仏会が行われ、にぎやかな行事がおこなわれている。

近隣の村々からは勿論、遠く作州、因幡から参詣する善男善女も多く、その名は広く世間に知られている。念仏会には千草の町中^{まぢな}は露店が並び、人波で雑踏を極めた。いつの頃からか、この念仏会に年頃の娘が毎年行方不明になるので里人は恐れて、寺に詣でる人が少なくなってきた。

時の住職はこれを心配して念仏大法会で、「人失せ退魔」の大祈禱を行った。

賑やかであつた昼間が嘘のように静かになつたその夜のことである。西山の「楮ノ木^き」という家でのことである。豊かな家であるが老夫婦がつつましく暮らしていた。この寺から半道程西に行つたところである。夕食をすませた二人が囲炉裏端で、鑪子^{かんとす}の湯のたぎる音を聞きながら、うとうととしているとき、入口の戸をたたく者があるので老母が出てみると、この附近ではいまだかつてみ

たこともない程美しい女が、顔青ざめ非常に疲れた様子で戸口にたたずんでいた。女は「私は島谷という山奥から千草念仏に詣るためで来たが、途中より腹が痛みだしここまできたが疲れて動くことができないので、どうか一晩泊めてください」と頼んだ。老母は心よく承知して八畳の一室に案内して休ませた。

女は「お世話になります。ゆっくり休ませていただいたら治ると思いますので、朝までどんなことがあつても私の寝ている部屋の戸を開けないで下さい。」と頼んで固く戸を閉じてしまった。

老母は女の言うことを不審に思い、女の寝静まつた頃戸の隙からそうと中を覗いてみると、黒々したものが部屋一っぱいになり、なんだろうと瞳^{ひとみ}をこらしてよくみると、それは大蛇が渦巻いている姿であつた。

老母はあまりのことに驚ろき、氣絶してその場に倒れてしまった。

その物音に大蛇は忽ち姿を美人にかえ、あわてて島谷の方へ逃げ去ってしまった。

老母はあわれにも発狂して毎日「大蛇がくる。大蛇がくる。」と叫び悶え続けるので、老夫は念仏寺に詣り任職にその事情を語り平癒の祈禱を頼んだ。

任職は大蛇が杖に逆^{さか}さに突き差しおくと、妻の病氣も



癒り二度と大蛇のおそ
うこともないと言って
帰らせた。

老夫は住職の言った
とおり庭先にその杖を
逆に差すと果して妻の
病気はなおり、また念
仏会の人失せもこの年
からなくなった。

その樁杖がそのまま
活き着き芽をふき大き
く成長した。樁の木屋
敷に苔のついた古い樁
があつて、村人達は「樁の逆杭」と呼んでいた。この樁
は昭和の初期まであつたが怖れていまはなく、屋敷も畑
となりだんだんこの話も忘れさられようとしている。

史跡部だより

今年はず定通り去る四月、次の三カ所に史跡の標識を
建てました。一応碑文を左記しますが、おついでにの
は、ゆつくり現場をごらん下さい。

<史跡>

篠の丸城跡

(上寺と門前からの一本松)
登山道の合流付近

篠の丸城は、標高三八八メートルの篠山の頂上にあつた。今はその城跡に、東西一五〇メートル、南北一〇〇メートルの平坦地と、西方に空堀や曲輪の遺構、又東南の山腹には、古地名平田丸、今は千疊敷といわれる台地がある。

山崎は、但馬因幡美作へ通じる要地であるから、元弘年間、赤松の一族釜内氏が山岳陣地として創始し、貞和年間、播磨守護職赤松則村の二男貞範が城郭を築き、長男顕範を城主とした。のち長水城ができてからはその支城となり、以後嘉吉の落城、文明の再興、天正の落城と長水城と運命を共にした。熊見城といった時代もある。

<史跡>

山崎藩 桜の馬場跡

(山崎小学校南側崖下へ下りた処)

元和元年、池田輝澄がはじめて山崎藩主として築城した当初は、城の南側崖下に、巾一〇メートル程の堀があり、その南側に馬場があつたが、本多氏入封後堀は埋められ、巾二メートルの溝川となった。その堤に接して東西に長く、約三〇〇メートルの馬場があつた。

馬場の北側、本丸から二の丸へかけての崖下には、桜

の木がたくさん並んでいたもので、桜の馬場といった。
またこの西方菅野川に近く、犬の馬場という地がある。
昔、たくさんの犬を飼っていた処といわれ、又、寺院の
馬場跡ともいわれる。

〈史跡〉

山崎藩 御倉屋敷跡 (宇原・上林建設事務所付近)

山崎藩で農民より取立てる年貢米は、城内と今宿及び
宇原の三カ所にある倉庫へ収納した。倉には倉番がいて
倉奉行が取締っていた。

川戸・宇原・下宇原の石高は合計一四〇〇石余で、そ
の年貢米が、宇原の倉庫に入れられた。

明治四年廃藩後、宇原の人は「お倉跡」といい、井堰
の作業場としていたが、のちその必要もなくなり、昭和
三十年五月、上林建設が買受けた。

お倉屋敷は戸原小学校の校地に続いていた。

昭和五十六年度 秋季研修旅行記

研修部 長 田 重 男

春の奈良旅行が好評であったので秋についても会員の
皆さんのご期待にこたえるよう地区幹事の皆さんと数回
の協議の結果、春と同様、皆さんがあまり行っておられ

ないところ、俗化していないところというところから丹後

の元伊勢と出石町に決定いたしました。募集してみると
一〇〇名の予定が大幅に超過しバス三台マイクロー一、百
九十四名となり中にはお断りした方もたくさん出る程の
盛況、うれしい悲鳴をあげる始末でした。十一月八日七
時二十分の集合というのに七時前から続々つめかけ番号
札を渡して整理十一名の欠席がありました。総勢百八
十三名で快晴の中を七時半すぎ出発、バスは快適に走り
ました。丹後路にかかりますと雪さえ交る小雨、まず今
日の第一の見学地である元伊勢に十時前着、以下見聞記
一、丹後国元伊勢、まず外宮参拝うつ蒼たる原始林の申
の石段をのぼると茅葺の社殿が見える。千木、かつお木
等伊勢と変りはない。宮司さんの先導で一同参拝、外宮
さんの由緒を説明していただく。祭神は豊受の大神、産
業の守護神、大和の笠縫邑から遷御され内宮さん伊勢へ
遷御の後も五百三十六年間この地に鎮座あり雄略天皇の
御代に伊勢へ遷御されました。伊勢遷宮の後も元伊勢外
宮さんとして広く全国民から崇敬されている。

次に元伊勢内宮さん、祭神は天照大神、櫛令三千年を
越す杉の大木、千古斧を知らぬ常緑闊葉樹林の参道をの
ぼると、ここでも茅葺、千木、かつお木の神明づくり、
参拝の後宮司さんのご懇切な説明をきく。天照大神は大
和の笠縫邑から遷御この地を第一の鎮座地とせられ四年

の後ここを出て諸所に祭り所を求め二十数カ所を経て伊勢の五十鈴川のほとりに鎮座されましたが、ここは元伊勢内宮さんとして今日まで全国民の崇敬を受けています。杉の大木の第一は竜灯杉樹令二千年を超すと推定、一昨年ろうそくの火の不始末でまる一昼夜焼けたが片身は今も青々と繁茂している。第二は麻呂子杉、用明天皇の皇子麻呂子親王が賊退治のみぎりお手植になったもの、裏山には天の岩戸もあり健脚の方数人はここへも参詣された。

二、切戸の文珠さん、文珠の智慧という菩薩さん、引つ切りなしに参拝者がある。三葉の松など見学、昼食は成相山下のみやげ物店、ここでも元伊勢さんがあって参拝した。

三、出石町、バスは丹後から但馬にはいる。雨は降ったりやんだり、出石町につく。かねて依頼していたので観光協会のガイドさん二人で二班に分れて町内史跡巡覧。

・出石城跡 天守閣はない、壮大な石垣や隅櫓を見る、松ともみじが美しい。

・宗鏡寺、禅寺沢庵寺ともいう、紅葉の美しい寺、どうざんつつじの葉が花のように赤い沢庵和尚の墓つつましい石碑に頭をさげる。

・出石焼窯元 白色のえも云われぬ美しい陶器、製作過程を巡覧、土産に出石焼を買われた会員も多数あった。

・辰鼓櫓、もと号砲台、明治以来は時計台。
・長軽屋敷、家老屋敷、時間の関係で割愛。
出石町を四時前出発山崎へは全員無事七時着、今回の旅行は役員の皆さんのご協力ことに安井事務局長のいたれりつくせりのご準備のもと安い会費でしかも有意義な研修旅行ができたことを深く感謝して見聞記を終わります。

事務局だより

一、昭和五十七年度も更に会員の増加をお願いしたいので、ご親戚、知人の方で未加入の方に郷土研究会へご入会をお勧め下さい。

二、五十六年度の研修旅行は春季（奈良）、秋季（元伊勢、出石）共に好評にて実施することができました。

今後の行先について会員の方々のご希望をお聞きしたいので左記へお知らせ下さい。

山崎郷土研究会事務局

山崎町

安井清介宅

編集後記

発刊が遅れて申し訳なく思っております。しかし、ご覧いただいたとおり、今回多くの方からの投稿をいただき会報部としてもたいへんうれしく存じております。今後とも当誌充実のため、皆様のご協力をお願い致します。